

日中韓3カ国農業政策研究所による 合同セミナーの概要

會田 陽久

農林水産政策研究所が、諸外国との研究交流を進めようとしている中で最も具体的に確立されているものに「北東アジア農政研究フォーラム」がある。その交流事業の中で主要なものの一つが、3カ国合同で行う農政研究のセミナーである。現在フォーラムに参加している機関は、日本では当研究所（PRIMAFF）、中国では農業科学院農業経済研究所（IAE / CAAS）、韓国では農村経済研究院（KREI）の三つである。

昨年のフォーラム設立と共に、第1回合同セミナーが韓国農村経済研究院を担当機関として、2003年10月にソウルで開催され3機関の研究員が集うこととなった。本年は、昨年の申し合わせにしたがい第2回合同セミナーを中国で開催した。現在の会員機関は、すべて各国の首都に位置しているので、昨年の例にならえば、北京での開催となると考えていたが、北京から南東に600km程離れた山東省威海市での開催となった。

今回のセミナーは、同期間に威海市で開催される北東アジア経済協力サミットと提携して開催されることとなり、セミナー参加者はセミナーの開催に先立ち威海金海岸大酒店で行われた北東アジア経済協力サミット開会式にも出席した。開会式は、中国国務院副総理の呉儀（Wu, Yi）女史をはじめとする、中日韓蒙の要人の挨拶、祝辞で進められた。



1. 合同セミナーの概要

セミナーは、サミット会場となっているホテルに隣接した山東大学国際研究交流センターで開催された。セミナーは、3機関の共催であると共に、山東省政府、山東省威海市政府、民盟中央科技委員会の後援という形をとっていた。日程は、セミナーを10月8日と9日午前に行い、その後、3カ国の所長と事務担当者による来年の開催に向けての会議を実施し、市内視察（水産物加工会社等）で主要な行事を終えた。

参加者は、日本から、西尾健農林水産政策研究所所長ほか同研究所研究員4名（伊藤正人・渡部靖夫・立川雅司・會田陽久）、国際農林水産業研究センター、チェン・シャオピン（銭小平）主任研究官の計6名、中国からはリ・チョアン（李重庵）全人大常任委員とユ・ヨンジ山東省威海市副市長の両名と、シュ・シャオチン（徐小青）國務院發展中心農村部副部長、シュ・シャオジュン（徐肖君）農業部市場・經濟信息司副司長、ジュ・シガン（朱希剛）中国農經学会顧問、チェン・クミン（錢克明）IAE所長ほか10名の計16名、韓国からイ・ジョンファン（李貞煥）KREI院長ほか6名の計7名で、全体で約30名ほどの出席者により報告と質疑応答が行われた。

前回との相違点は特別にコメンテーターを設定しなかったことである。使用言語については、前は3カ国の出席者が各々母国語で報告、コメントをし、通訳が各国語に翻訳して出席者がイヤホンでそれを聴くという形式であったが、今回は、英語と中国語の2カ国語により進行された。日韓の出席者は、英語を使用し、中国側出席者は銭所長が開会に当たっての歓迎の挨拶と座長としての進行を英語でした以外は、報告には中国語を用いた。セミナーの統一テーマは、「グローバル化下の食品安全と食料安全保障」であり、各セッションの概要と発表者は次の通りである。

10月8日

第1セッション「開会式」

司会：リウ・フェンヤン（劉鳳彦）（IAE）

歓迎の辞 チェン・クミン（錢克明）（IAE）

第2セッション「北東アジアの食料安全保障政策」

座長：イ・ジョンファン（李貞煥）（KREI）

第1報告「中国における穀物安全保障政策と流通機構の改善」

シュ・シャオチン（徐小青）（國務院發展中心）

第2報告「日本の食料安全保障問題と政策方向」

伊藤正人（農林水産政策研究所）

第3報告「韓国における食料安全保障問題と政策対応」

イム・ソンス（林頌洙）（KREI）

第3セッション「北東アジアの食品品質保証と食品安全」

座長：西尾健（農林水産政策研究所）

第1報告「非汚染食品行動計画実施以降の中国農産物の品質状況」

シュ・シャオジュン（徐肖君）（農業部市場・経済信息司）

第2報告「遺伝子組換え作物：国際的フードシステムに及ぼす影響」

立川雅司（農林水産政策研究所）

第3報告「韓国の食品安全システム」

チェ・ジヒョン（崔志弦）（KREI）

第4報告「中国の穀物需給均衡分析」

ジュ・シガン（朱希剛）（中国農経学会顧問）

10月9日

第4セッション「北東アジアの農業貿易モデルとデータベース」

座長：ジュ・シガン（朱希剛）

第1報告「北東アジア諸国の農産物貿易と問題点」

クォン・オーボク（権五復）（KREI）

第2報告「牛肉の国際貿易の構造変化とその影響：AGLINKモデルを利用したシナリオ分析」

上林篤幸（農林水産政策研究所）

代理報告 渡部靖夫（農林水産政策研究所）

第3報告「北東アジアの農産物貿易問題に対する研究方法の検討」

リウ・シャオヘ（劉小和）（IAE）

2. 報告の主な内容

順番にしたがって各報告について概略を説明する。第1セッションは、前述したとおり歓迎、開会の辞であった。

第2セッションは食料安全保障政策がテーマであり、シュ・シャオチン（国務院発展中心）報告は、穀物の安全保障政策に関し、生産貿易、政策について説明した上で、流通体制の改革について現状で改革されるべき問題点を示した。日韓が先進国であるのに対し、中国はまだ発展途上国であると位置づけをし、これから二極、多極の協力体制が始まるときであると締めくくった。

伊藤報告は、日本の食料・農業について、日本の食料自給率が低いことを示し、農業に関し土地、労働、農村についての分析を行った。食料安全保障のための国内生産の役割を示し、日本の食料安全保障について説明し、基本計画と今後の方向性について考えを述べた。

イム・ソンス（KREI）報告は、食料安全保障の概念を整理し、地球規模での食料安全

保障について、可耕地と人口、生産と貿易、備蓄、カロリーとタンパク質の消費、価格とその変動の各側面から接近した。同様に韓国の食料安全保障の問題を分析し、人口増加、農業投資の制約、貿易自由化と国内政策といった側面から政策的対応を考察した。

第3セッションは食品安全の問題を扱った。シュ・シャオジュン（農業部市場・経済信息司）報告は、中国農産物の質と安全性の問題、農産物の品質管理の現状、非汚染食品の推進計画について説明した。

立川報告は、遺伝子組換え作物が国際的フードシステムに与える影響について検討を行った。検討の観点は貿易相手先の変化と国際的フードシステムの変化の二つに分けて進められた。前者については、GMOの登場によるトウモロコシ、ナタネ、小麦の貿易相手国の変化について概観した。後者については、国際的フードシステムの変化、特に分別流通システムの構築に伴う変化を日本とアメリカの食品用大豆を事例に分析した。

チェ・ジヒョン（KREI）報告は、韓国での食品安全性に対する消費者の関心の高まりを踏まえ、リスク分析システムと関連問題、食品安全性計画（HACCP、GAP、トレーサビリティ）、食品安全性についての戦略に渡って検討を加えた。

ジュ・シガン（中国農経学会顧問）報告は、中国の穀物需給の動向を生産の変動を軸に貿易に及ぼす影響を中心に説明した。

第4セッションは農業貿易を扱い、モデル構築という手法的関心が強い報告でまとめられた。クォン・オーボク（KREI）報告は、農産物の大輸入国である日中韓の農産物貿易の動向について品目、貿易相手国を中心に分析し、農業貿易への依存度を検討した。また、北東アジア諸国における農産物貿易問題をFTA、WTO交渉等について検討した。

上林報告は、AGLINKモデルを用いて、BSEの発生によるアメリカ産牛肉の輸入中止が、日本をはじめとする環太平洋地域の牛肉市場に及ぼした影響を分析した。牛肉の国際価格上昇とBSEが発生していない輸出国の利益拡大、アメリカの国内価格の下落、輸入国における代替的食肉の需要増加が予測されていた。

リウ・シャオヘ（IAE）報告は、貿易の分析手法を検討することと今後の共同研究計画について述べた。

報告の内容とセッションごとの報告の構成は昨年第1回セミナー以上に整合性のとれたものになりつつあると感じた。一部に齟齬を感じることもないではないが、共同セミナーを開催することによる利益がそれにまさっているといえよう。質問は、事実認識、手法等に渡って活発になされた。農業の問題に関する関心事項については、日韓と中国の間では微妙に差があることを感じるが、それも北東アジアの農業を把握、分析する上でセミナーがもたらしてくれた恩恵であると思う。

3．威海市について（若干の紹介）

前述したとおり、今回のセミナーは北東アジア経済協力サミットと提携して開催されたが、そちらの方の参加者の多さに比べるとこじんまりした環境で落ち着いた報告が行われ

た。図らずも北京以外の威海という土地での開催であったので、現地視察も含めて若干記述しておくこととする。

威海は、地図上で測ると直線距離で北京から 600km 位であるが、渤海に突き出た山東半島の北部に位置しているため、間に海もあり陸路の距離はそれ以上になる。中国農業経済研究所の職員が、今回の会議のために関係機材を北京から運び込んでいたが、片道車で 13 時間ほどかかったということである。我々は、成田から韓国仁川を経て煙台（イェンタイ）空港まで行き、車で小 1 時間かけて威海市に到着した。山東半島は、黄海を朝鮮半島に向かうように突き出ており、煙台空港は仁川から飛行機で 1 時間もかからないような近さであり、威海市の住民の中で最も多い外国人は韓国人とのことであった。

聞き取った話を総合すると威海市の人口は 50 万人、その周辺を含めて 300 万人であり、山東省の人口は 9,000 万人とのことであった。山東省は、果樹、野菜作が盛んで、韓国人研究者の話によると、りんご、なし作の調査をしたことがあるとのことであった。煙台から威海までの風景は、防風林としてのポプラの並木と色づいたりんご畑が印象に残った。日本でスーパーマーケットに行くと、山東菜という小松菜に似た野菜があるし、山査子のドライフルーツには山東産の表示があり山東省が園芸作の盛んな地域ということが窺える。

威海のもう一つの特徴は、港湾都市ということであり、日本ではなかなかお目にかかれないような 2, 3km に渡る長い砂浜があり、漁業も盛んである。視察した水産加工会社は、1 社は日本企業の資本が入っており、ちょうど日本向けのアカウオをさばいていた。もう 1 社では、日本向けの水産加工品を主力商品としており、シメサバの生産現場を見学した。また、水産加工品以外にも味付けかんぴょう、すし用のがり等も日本向け輸出品として製造していた。威海というと歴史的な話では清の北洋艦隊の基地としての威海衛の地名が思い浮かぶかもしれない。明代に倭寇対策の衛所があったためそういわれたが、清代に入ってから現在の名称になり、その後も慣用的に威海衛と呼ばれたそうである。